

本日の学び テーマ：「救い主到来のしるし」 テキスト：ヨハネ2章1節-11節

【理解の手がかりとして】

「カナの婚礼」、これはヨハネ福音書に記された最初の奇跡。11 節に「イエスは、この最初のしるしをガリラヤのカナで行って、その栄光を現された」とあるようにイエス様の公生涯での最初の奇跡として記念されてきた出来事である。

「カナ」とはガリラヤ湖の西、イエス様の育たれた「ナザレ」の北北東の町である。そのカナで、イエス様とその弟子たちとは婚礼、つまり近しき関係の誰かの結婚の式に招かれた。ある人はこのことを、イエス様は婚礼という生活の中の身近な喜びの出来事にも共におられ我々と喜びを共にして下さるのだ、と解釈している。確かにそのことはそうなのだろうし感謝な事である。

しかし福音書著者が、イエス様の活動の初めにこの記事、奇跡を記したのは、もっと特別な意図があったと思われる。「婚礼」とは聖書の至るところで特別な意味で使われている言葉である。すなわち、マタイ福音書9章15節には「イエスは言われた。

『花婿が一緒にいる間、婚礼の客は悲しむことができるだろうか。しかし、花婿が奪い取られる時が来る。そのとき、彼らは断食することになる』とあり、またヨハネの黙示録19章7節には「わたしたちは喜び、大いに喜び、神の栄光をたたえよう。

小羊の婚礼の日が来て、花嫁は用意を整えた」とある。マタイの記す「奪い取られる花婿」とは神の御子イエス様ご自身のことであり、黙示録の記す「小羊の婚礼」の「小羊」もまたイエス様ご自身のことである。聖書は、なぜ神がこの地上に御子をお送りになられたかということを、「婚礼」という事柄をもって——御子自身を「花婿」として、そして神の民（私たち）をその花婿と共に歩むように招かれている「花嫁」として——教え示すのである。

イエス様はこの婚礼の席で、本当の花婿とは誰か、ということの一つの奇跡でお示しになる。事の状況は3節を読めば一目瞭然。「ぶどう酒が足りなくなったので、母がイエスに、『ぶどう酒がなくなりました』と言った」とある。ユダヤではぶどう酒は欠かせない大切な飲み物。しかもお祝いの時にはなくてはならないものだった。そのぶどう酒が足りなくなったというのだから、ことは重大、緊急である。

その母マリアの訴え掛けに対して、イエス様はどうお応えになったか。「婦人よ、わたしとどんなにかわりがあるのです。わたしの時はまだ来ていません」とお応えになった。イエス様は、この呼びかけの言葉によって、ご自身がどういうお方であることを、語っておられる。すなわち、ご自身とマリアとの関係が、息子と母親の関係を越えたものであることを、この呼びかけによって、すでに示しておられるのである。

そしてさらに、イエス様は「わたしの時はまだ来ていません」と言われる。ヨハネ福音書で、イエス様が「わたしの時」と言われる場合、また他の人がイエス様について「イエスの時」と言う場合（7:6、7:30、8:20 など）、それは、神によって定められた死の時、すなわち十字架の時を指す。あるいは、その死によって与えられる栄光の時を指す。そのような時はまだ来ていないとイエス様は言われたのである。

その時のためにこそ、イエス様は地上に来られた。その時のためにこそ、イエス様は今その公の生涯を始められた。イエス様の目は、今その時に向けて注がれている。そして、やがてその時が来たときに、そこで起こるのは、何か。それは、人間の救いである。それは、今暗黒の中に生きている人間のために、新しい太陽が差し昇る時である。そのような時に向かって、イエス様は今歩き始めておられる。そのような時に対して、イエス様の目は今注がれている。

それに対して、この婚礼の席で母マリアがイエス様に向かって持ち出した問題はどのような問題だったか。それは婚礼の席でぶどう酒が足りなくなったということ。そして、マリアが願っているのは、その足りなくなったぶどう酒が再び満たされて、この席にもう一度喜びが帰って来るということ。それは、今イエス様がその使命としておられることに比べて、何という小さな願いだろうか。それは、イエス様がやがて差し昇らせようとしておられる太陽の光に比べれば、ほんの小さなロウソクの光のようなものに過ぎない。イエス様はそのことを母マリアに告げなければならない。ご自分がどのような使命を与えられて今ここにいるのかを、示さねばならない。それゆえにマリアに対して「婦人よ、わたしとどんなにかわりがあるのです。わたしの時はまだ来ていません」と語らねばならなかったのである。

6 節の「石の水がめ」というのは、「ユダヤ人が清めに用いる」とあるように、清めのための水がめであった。ユダヤ人には、家に入る前にほこりで汚れた足を洗うという習慣があった。また食事の途中でも手を清める習慣があった。そういう手足の清めのために、どの家にも水がめが用意されていた。2 ないし 3 メトレテス入りのもの（1 メトレテスが 39 ㍓）、およそ 80～

120 ㍻ほど入る水がめというのだから随分大きな水がめに違いない。しかもそれが6つもあったという。

そしてイエス様はそのかめに入っていた清めの為の水をぶどう酒に、それも最高のぶどう酒に変えられた。最後の11節に「イ

エスは、この最初のしるしをガリラヤのカナで行って、その栄光を現された。それで、弟子たちはイエスを信じた」とある。

さて、イエス様がこの奇跡を通して現された栄光とは何だろうか。

この奇跡において起こったことは、イエス様が水をぶどう酒に変えたということ。宗教改革者ルターは言う。ここで起こって

いるのは「被造物の変化という出来事である」と。水という被造物がぶどう酒に変えられるという出来事であると。そして、

この被造物の変化という奇跡は、やがて「彼の時」が来て、イエス様が十字架につけられる時が来て、そこで起こるであろう

ことを、指し示している。すなわち、すべての造られたものが逃れ得ない、罪と死への定めが突破されて、すべての被造物が

新しい生命に招き入れられるという、全被造物の変化を、この出来事は指し示している、と。そのような奇跡が、イエス様の

生涯の最初の奇跡として起こったということはとても意味深いことだと言わねばならない。

さらにその水がぶどう酒に変えられたということは、単に被造物の変化を表しているだけでなく、ユダヤのしきたりで清めの

媒介として用いられていた「水」が「ぶどう酒」に変えられたということは、すべての被造物の罪と死への定めとは、ぶどう

酒、つまりキリストの血潮によって清められるのだということをも示している。

宴会の世話役はこう言った。「だれでも初めに良いぶどう酒を出し、酔いがまわった所に劣ったものを出すものですが、あな

たは良いぶどう酒を今まで取って置かれました」と。この言葉は待ちに待った救い主に会った感動と同じである。シメオン

が幼な子イエスを抱き神をたたえて言った言葉「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり、この僕を安らかに去らせてください

ます。わたしはこの目であなたの救いを見たからです。これは万民のために整えてくださった救いで、異邦人を照らす啓示の

光、あなたの民イスラエルの誉れです」を思い出す。

11節に「それで、弟子たちはイエスを信じた」と記されている。弟子たちは水がぶどう酒に変えられたという奇跡に驚きその

ことを信じたのかもしれない。私たちはこの出来事が指し示す十字架を通して、イエス様を、自分たちを罪と死の支配から解

放し新しい生命に入れて下さる方として信じたい。

『聖書教育』より

「イエスさまは、人を分け隔てする律法の規定の対象であった『水がめの水』を『良いぶどう酒』に変えることをもって、すべての人の救い主が到来した『しるし』となさったのだと、ヨハネ福音書は証しているのではないのでしょうか」（聖書の学び〜救い主到来のしるしとして）——律法の成就（完成）者としての御子イエス様の使命を読み取る釈義である。